神に捧げる最高の教会

ガウディのサグラダ・ファミリア（聖家族教会）は、そこで働く日本人彫刻家として前回紹介した外尾悦郎氏によると「ガウディは人間がつくり得る最高のものを神に捧げたい」と考えていたという。

ガウディの伝記や外尾氏の本を読んで、それが納得できた。

聖家族教会は彫刻がたくさんある大聖堂と考えていたが、実は造形だけなどではなく、音や光をからませた壮大なものなのだ。

完成予想図をよく見てほしいが、正面が東の生誕の門。西の受難の門はちょうど真後ろになるので見えない。左側の側面のものが南の栄光の門で、今、建設中である。

中央の一番高いイエス・キリストの塔と右の聖母マリアの塔はまだ建設されていない。

すでに完成している生誕の門の写真の四本の鐘塔と比較しながら、完成予想図を見ると、実に巨大な聖堂であることがわかる。

大きさもさることながら、すごいのはその中身である。

生誕の門の四本の鐘塔には八十四の鐘が取り付けられ、ピアノの役割を果たす。

受難の門の鐘塔にはパイプオルガンが、栄光の門には打楽器が取り付けられるという。

ガウディは「建築の価値基準はその空間に音楽性があるかどうかによって決まる」と言っている。彼は単なる建築家ではない。

聖堂内には千五百人の聖歌隊の席があり、これらの音をミックスして放たれる音は、聖堂内だけでなく、各鐘塔に無数に開けられた窓を通してバルセロナの街に降り注がれる。

音楽だけではない。光に対しても工夫がなされ、一番高い百七十メートルのイエスの塔の頂上から天と四方に向けて光を放ち、天から見ると光の十字架になるという。

さらに十二使徒を象徴する十二の鐘塔の頂上から二本の光が放たれ、一本は中央のイエスの塔をライトアップし、もう一本の光はバルセロナの街を照らす。

窓の色鮮やかなステンドグラスを通した光は宝石のように輝く。

十八本の塔がそびえる巨大な聖堂での音と光、それを想像するだけでも胸が高鳴る。

ガウディは、神に捧げるだけでなく、それを通して人間を幸せにするものにしたいと考えていたという。

そう言えば一八八二年に着工した際の礎石には「眠った心を生温さから目覚めさせ、信仰を高めるため、隣人愛を鼓舞し、神が祖国を哀れみ、祖国がカトリック信仰によって美徳を思い、予言し、実践することを願って」とある。

着工から早や百二十五年。完成まであと百年から二百年と言われ、ガウディは「神は急がれないから」と言っていた。

ところが最近になって、あと二十年で完成と言われ始めた。

科学が発達し、人間の考え方が合理的になり、神不在ともいえる現代社会。急いで観光名所を完成することなく、ガウディが「サグラダ・ファミリアは神の摂理である」と言ったように、人間が向かうべき方向性を示唆し、人間を本当の幸せに導く聖堂として完成されることを願うのである。

今、私たちに求められているのは、急いで走ることではなく、何を大切にすべきか考えながらゆっくり歩くことではないだろうか。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

聖家族教会の完成予想図

これまでに完成した「生誕の門」